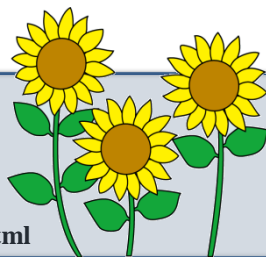


かけはし



発行：峡南教育事務所地域教育支援担当

所在地：南巨摩郡富士川町鯉沢 771-2

TEL：0556-22-8154

FAX：0556-22-8144

HPでもご覧になれます



URL：<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-mk/index.html>

峡南地推協 新会長あいさつ



地推協 丹澤葉子新会長

平成20年12月から市川三郷町の教育委員を務めております丹澤葉子と申します。またこのたびは、去る7月9日に開催されました峡南地域教育推進連絡協議会の総会において、会長に選任されました。微力ではございますが、峡南地域のよりよい教育を推進するために努力して参りたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。

さて、新年度会長就任の挨拶を、ということですが、今年の1月24日の山日新聞「10代の意見」に、我が意を得たり！と思う高校生の意見が載っていましたので、ご紹介するとともに若干の意見を述べさせていただきますと思います。

——何よりも、今の若者たちが優しく思いやりのある人間性を養うためには、家庭での丁寧な教育や、大人たちが、若者がこんな人間になりたいと思う見本を示すことの方が大事だと私は思う。(白根高3年M君)

どうですか、皆さん。子どもに言われてしまいましたね。あたり前のことなのですが、なんと心にズシッと来ることか。「家庭での丁寧な教育」、もちろんただ単に手をかけるということではありません。逆に、いかに過保護過管理過干渉を排し、真に必要な手助け、言葉かけがタイミングよくできるか、その見極めを“丁寧”と言うのでしょうか。親にとって非常にエネルギーの要ることですが、天からの大事な預かりものである子どもを一人前の社会人にしてお返りするまで、親は絶えず自らの心の奥底をチェックし、生き方を反省しながら進まなければなりません。

「若者がこんな人間になりたいと思う見本を示すこと」、これも非常に考えさせられます。人間、年齢を重ねるといやでも記憶力や体力等いろいろな能力が落ちてきます。しかし、逆に伸ばすことのできる能力がひとつだけあると言われていいます。それは、長年の知識経験に基づく人格の力だと言うのですが…、本当でしょうか？残念ながら社会を見回してみても、これも落ちていく力のひとつとしか思えないような絶望感があります。少子高齢化の時代、どこへ行っても中高年の姿が目につ

きます。その中高年が若者から「何十年も生きてきてこの程度の人格レベルなのか」と思われたとしたらどうでしょうか？「はたして年を取ることに希望はあるのか？」、そう思う時の若者の絶望感はいかばかりかと思ひます。われわれ大人が皆、若者からこうなりたいと思われるような人間性を携えていたなら、さぞかし日本も明るいものとなることでしょう。もちろん誰にとってもこの世は娑婆苦、楽な人生などありませんが、それでも、たとえわずかでも人格の高みを目ざして生きていく姿勢が大人には求められていると思ひます。峡南地域の教育に携わる皆さん、ともに勉強して参りましょう。地推協がその一助となれば幸いです。

平成25年度 (富士川町立増穂小学校) 一日教育委員会開催

7月10日に、増穂小学校(古屋三千雄校長)で、平成25年度の「児童生徒と語る一日教育委員会」(山梨県教育委員会主催)が開催されました。これは、学校教育を取り巻く環境や制度が大きく変わりつつある中で、児童生徒が学校や社会に対してどのように考えているかを県の教育委員が直接知ることとおして、よりよい教育行政の推進に役立てていくというものです。教育事務所の管轄ごとに隔年で開催されています。



当日は、県の教育委員をはじめ県と町の関係者25人が増穂小学校を訪れました。はじめの会のあと、校内の視察に続いて、瀧田武彦教育長を含めた6人の教育委員は、5～6年生の各クラスで特別授業(講話)を行いました。工夫が凝らされた、そして心がこもった講話に子どもたちは生き生きとしたまなざしを向けて聞き入りました。さらに各教室において給食をともにしながら意見交換を行い、午後には教職員との懇談もなされました。

訪れた方々からは学校現場の熱意あふれる様子に感心する声が聞かれた一方、児童からも通常の授業とはまた異なった、楽しくて分かりやすい講話がとても興味深かったとの感想が述べられました。



無病息災の願いが込められた「祇園祭典」

毎年7月の第2土曜日市川三郷町市川大門中央通りで開催される「祇園祭典」は、天照皇太神(あまてらすおおみかみ)の弟、須佐之男命(すさのおのみこと)を祭神とする須佐之男社(すさのおしゃ)のお祭りで、通称「ぎおんさん」という名称で町内の人々に親しまれています。須佐之男社は、その昔町内にある曹洞宗天王山慶福院の境内にありましたが、寺の大火や神仏分離により八乙女地区の現在の場所に移転されました。

今年も須佐之男社の氏子が中心となり、7月13日に「祇園祭典」が開催されました。当日は、社内で神事や玉串奉典が執り行われた後、格納されていた宮神輿をトラックで行在所へ運びました。

かつては、市川大門6丁目の青年衆が、2日間にわたり神輿を担いで町中を練り回すさまが壮観であったと言われていました。また、ここ20年以上祇園神輿保存



会が中心になり、神輿渡御を行ってききましたが、今回は諸般の事情により渡御を実施しないことになったのだそうです。

ところで、祇園祭典といえ、地元では「キュウリ」が有名です。それは、須佐之男命の神紋が木瓜紋(もっこうもん)で、キュウリの切り口に似ているからだそうです。さらに、市川大門に疫病が流行った折に、キュウリを食べたら治ったという言い伝えから、無病息災の願いを込めて、キュウリをお供えするならわしになっています。神輿の前に備え付けられた桶の前には、祭りに集まった人々が、桶にキュウリを2本入れ、かわりに桶に入っているキュウリ1本とお札をいただいて帰ります。夕方から夜にかけては、NPOによる露天が40店以上並ぶ中央通りを、町内の園児や小学生約70



人が参加した子ども神輿(4基)、御陣屋樽神輿保存会により今年が復活20周年となった樽神輿、さらに大門睦(だいまんむつみ)と、三種類の神輿が練り歩き、祭りを大いに盛り上げました。

『手話』を通して福祉のこころを育てよう!!

南部町 栄小学校・PTA

栄小学校PTAでは、身延山高校手話コミュニケーション部(顧問・小澤伸英教諭、部員生徒10人)と手話通訳士(遠藤なおみ氏)を講師として招き、6月26日に文化庁主催による事業「手話を学ぼう」を実施しました。この事業は、校内で読書ボランティアとして活動している地域の方の紹介で実現されました。会場となった体育館には、全校児童、保護者、教職員ら約140人が集まりました。当日は、顧問の小澤先生から手話の魅力や「共に

を手話で表現したりしながら、交流を深めました。

身延山高校手話コミュニケーション部では、小学生との交流は初めてと



いうことで、参加した部員はととてもはりきって指導していました。また、栄小学校の児童も手話を通して、障害者と健常者が共に幸せに生きることの大切さを学ぶ、とてもいい機会となりました。参加した保護者からも「歌に合わせて自然に手話を覚えることができてとても楽しかった、子どもたちもとてもいい勉強になりました」などの感想が寄せられました。



地域のかあわせて防災への取り組みを

身延町 久那土中・久那土小・久那土保育所

現在、各町では、実際の災害発生に備えて地域ごとに学校等の枠を越えた帰宅・引き渡し訓練を実施するケースが増えています。身延町内でも各地で保幼小中などの合同引き渡し訓練を行っています。6月28日には

しさを肌で感じる機会を得ました。合同引き渡し訓練では、園児・児童・生徒が校庭に集合し、兄弟姉妹や近隣の子もたちが声を掛け合う様子も見られました。こうした「顔の見える防災への取り組み」が、いざという時のより有効な備えになる、という保護者の率直な感想がとても印象的でした。



久那土保育所・久那土小学校・久那土中学校合同の引き渡し訓練が行われました。当日は、これに先立ち小中学校で起震車体験も行われ、東日本大震災などの恐ろ



峡南地域の県立学校

県立身延高校 「**身**高祭」

初夏の2つの学園祭

県立市川高校 「**龍**胆祭」



6月19日(水)～21日(金)には身延高校の「**身**高祭」が開催されました。64回の伝統を誇る今年の身高祭テーマは、「**百花繚乱**」。昨年、学校は創立90周年。さらに今年度は総合学科高校としての新入生を迎え、新たな勢いに乗ったバラエティー豊かな学校の様子が、まさに色鮮やかな花々のように映し出された学園祭でした。

初日は身延町総合文化会館ホールにて、1年生の合唱、2年生の創作ダンス、3年生の創作劇のそれぞれ発表と審査が行われました。



2日目は学校体育館でシンボル旗発表、吹奏楽部公演が行われたほか、世界の各国をテーマにした各クラスの発表や工夫に富んだ展示を行う



演劇部公演ポスター

「**身**高コレクション」、午後の新企画(歌を中心とした各クラスのパフォーマンス大会!)、模擬店などが催され、大いに盛り上がりました。文化部の熱意ある発表もあり、演劇部の公演では高校生のリアルな学校生活をモチーフにした大変巧みな描写、迫真の演技に大きな喝采があがっていました。

増穂商業高校 一日体験入学

オープンスクール・地域活動

わかば支援学校 ふじかわ分校 第1回オープンスクール

増穂商業高校(佐久間豊人校長)では6月22日に一日体験入学が行われ、中学生と引率教員・保護者など、およそ300人が学校を訪れました。全体説明会では、社会における実務的な学習ができることや検定・資格試験などへ意欲的な取り組みができることなどが紹介されました。続く体験授業では「総合実践(小切手作成)」と「情報処理(コンピュータ操作)」の2つの授業に臨みました。その後の部活動見学の時間では、バレー・弓道・テニス



・野球・バドミントン・卓球・陸上競技など、熱心な活動の様子に見入っていました。参加した中学生のひとり、実際に訪れて先輩の姿や新しい学習への取り組みにあらためて魅力を感じた、と話してくれました。

峡南高校「地域貢献」への取り組み

峡南高校(矢野博文校長)では、地域の環境美化の貢献や地域活性化のための活動を積極的に進めています。7月17日に学校周辺清掃活動で三沢川を含めた地域清掃を行ったのに続き、夏休み初日の25日には、「本栖湖清掃活動」を実施しました。これは32回目を誇る同校恒例の行事で、生徒会や有志の生徒約70人が参加しました。今年は富士山の世界文化遺産登録もあり、ゴミが比較的少なめでしたが、参加した生徒は厳しい暑さの中、意欲的に取り組んでいました。

一方、地域の活性化への貢献として、身延町大島地区特産の「大島コロッケ」をPRし、地域の魅力を広く発信する活動を行いました。大島地区の方々との打



市川高校の「**龍**胆祭」は、6月26日(水)と27日(木)の2日間。テーマを「**青春する? doする? いんどうる?**」と銘打って開催



されました。ちょうど今年が第60回を迎える学園祭。来年は、学校が創立100周年を迎えることもあって、まさに伝統と若ましいパワーに満ちあふれた行事となりました。

「**if**」、すなわち“いちかわファミリー”の合い言葉のもと、生徒と職員がひとつになって取り組む様子はまさに圧巻。



初日は音楽部と吹奏楽部の発表に続き、校内各教室で一斉にクラス企画・クラス展示・各部各委員会展示が披露されました。どの教室も工夫を凝らした展示内容で、大いに賑わっていました。午後は合唱コンクールとなり、各クラスの熱い意気込みがよく発揮された合唱となりました。



2日目はのど自慢と職員発表で始まり、日常とはひと味違った生徒や先生方の姿に大きな歓声があがっていました。

6月25日には、鯉沢のわかば支援学校ふじかわ分校(星野浩章校長)で第1回オープンスクールが開かれ、地域の関係機関の職員や民生委員、保護者などが参加して、学校内の施設や教育活動について説明がなされました。星野校長は冒頭の挨拶の中で、小規模校ならではの特色を生かしていることや一人ひとりのニーズにそった学習が展開されていることを述べました。

当日の授業見学では、小学部中学年の図工の色遊びの授業、高学年の校外学習から戻ってのVTRによる振り返り授業、中学部では日常の子どもたちの生き生きとした学習の様子が見られ、前向きで意欲的な雰囲気がうかがえました。



ち合わせや生徒による商品開発の検討、販売方法や広報活動の工夫など、精力的に研究を重ねて7月14日の大島農



(写真は峡南高校提供)

林産物直売所での「大島コロッケまつり」の実施につなげていきました。入念な事前調査と準備に基づいたこの企画は大好評を博し、生徒が企画したコロッケなどの品々は開店数時間で完売となりました。この成果は8月2日の山梨県高等学校生徒商業研究発表大会で披露され、見事優勝の栄冠を勝ち得て、9月15日に埼玉県で開かれる関東大会の山梨県代表に選ばれました。参加した情報ビジネス科の生徒は、自分たちの可能性を再確認し、地域の活性化に関する貴重な経験を得ることができたとのこと。

ことぶき勸学院峡南教室で学習に取り組んでいる小松和美さん(南アルプス市)は、自ら学んだことをもとに地域社会とのつながりを広げる活動をしています。小松さんの活動の中心は朗読や紙芝居の上演です。自作の大型の紙芝居を携え、施設訪問を行ってきました。6月26日にはちょうど記念すべき100回目を迎え、鯉沢病院に併設される介護老人保健施設「サンビューかじかざわ」で、入所する高齢者に2題の紙芝居を上演しました。食堂ダイルームに集った方々は一様に懐かしそうな表情を浮かべ、紙芝居に見入っていました。

勸学院は、自分のための生涯学習のみならず、地域や他の方のための学びをも実現することを目指すものであ

るとされています。小松さんの取り組みはこうした勸学院の社会的役割を实践するもので、今後も依頼があればできるだけ開催していきたいと意気込んでいます。

峡南教室では、このほか市川三郷町の歌舞伎文化公園の清掃活動や地元の小学校の環境整備活動などを精力的に行っています。積極的な地域活動を進める中で、一人ひとりが輝くような取り組みを重ね、地域づくりに励んでいます。



平成 25 年度 人権講演会要旨

「いじめ」問題から見えるもの (第1回) 准教授 高橋 英児 氏
 ~私たちは「何を」問題にすべきか~

7月9日の平成25年度人権講演会(峡南教育事務所主催)では、山梨大学の高橋准教授をお迎えて「いじめ問題」について考えました。定員を上回る参加者に対して、いじめ問題の本質を多角的にとらえようとする新しい視点を持つ必要性が提起されました。今号から3回にわたり、その要旨をお伝えします。

(1)「いじめ」問題とは何か

これは当初から「いじめ」問題として存在していたわけではなく、メディアによる報道とそれによる社会的関心の高まりの中から成立してきた経緯がある。1960年代から70年代後半にかけての「いじめられた」ことに対する報復事件、1980年代前半の「弱いものいじめ」という言葉の広がり、1985年からのいじめに関する実態調査のはじまり、さらには、1979年以降のいじめによる自死事件の発生とその報道が社会的に大きな影響を与えてきたことなどによって、深刻な問題としてクローズアップされるようになってきた。注目されるのは、かつては「いじめる、いじめられた」という動詞として用いられた言葉が、「いじめ」という名詞的用法で、報道メディアにおいて顕著に使用されはじめたのは1980年代前半頃以降、ということである。

実態調査等に基づく今日のいじめ問題は、一般的には、第1期(84~86)の**集団内の意識的いじめ**(いじめ・いじめられ関係に特別な因果関係が見られない)、第2期(94~)の**気晴らし・暴力的いじめ**(暴力・金銭・性と結びつく一方で、遊びとしてのいじめ等が外から見えにくくなる)、第3期(06~)の**ネット世界への拡大**(2期に加えネット世界へ広がり、自殺事件が相次ぐとともに教委等による隠蔽が明らかになる)、第4期(11~)の**社会全体におけるいじめ構造の拡大**(大津事件など社会的衝撃が非常に大きくなる)、ととらえることができ、文科省の「いじめ」の定義の修正もこうした段階的変化と軌を一にしている。

「いじめ」の社会問題化のサイクルは、**事件発覚→学校や行政の隠蔽・責任逃れへの批判→学校や行政の「謝罪」**、という事件展開の側面と、**事件発覚→緊急総点検→発生件数の急増**、という統計的な特徴とが認められる。

この統計面や調査結果については冷静にとらえるべきで、いじめの深刻化や加害者・被害者の急増・急減という傾向があるという短絡的な見方は正しくない。いじめの深刻化や増加が日本社会の将来に大きな脅威となるという見解も報道されるが、例えば青少年の凶悪犯罪の統計では1960年代をピークに漸減しており、そのころ青少年であ

山梨大学教育人間科学部学校教育講座

准教授 高橋 英児 氏



高橋英児氏

った方々がここにもたくさん参加していると思われるが、必ずしも危惧されるような社会情勢に至っているわけではない(笑)。

今日のいじめの特徴としては、被害者・加害者は固定した関係ではなく入れ替わりがあり、約8割の子どもが加害・被害双方を経験していること、被害経験は小4から中3まで緩やかに減少、加害体験は小5から中1までがピークでその後減少していること、等のデータ読み取りが可能である。

(2)「いじめ」問題の何を問題とすべきか

◆**子どもの人間関係・社会形成の様子** 以上からいじめ問題を、メディアによる一面的な社会問題としてだけでなく、多角的に見る必要性が認められる。また、いじめをかつての「心の問題」としてだけでなく、「人間関係のあり方」としてとらえていく視点も必要であり、今日的な子どもたちの関係や社会形成という側面では、①いじめの原因では、個人の資質等の「属性」ではなく、**集団の正義(規範や合意)からの逸脱への制裁が原動力となる場合がある**、②**集団の正義は「ノリ」や「キャラ」、「空気を読む」というレベル、つまり「遊び」の価値観が基準となる場合がある**、③**「異質なものを排除する「集団的迫害」という垂直的暴力と、同一グループ内の弱者への暴力という水平的暴力の二つの側面がある**、④**子どもの人間関係の背景として、孤立化を避け親密な関係を維持しようとする過剰な気遣い、親しいが故に緊張せざるを得ない「優しい関係」の維持が異なるものを避けることにつながる、といった特徴が認められる点に注意が必要である。**

◆**「いじめ」に向かわせるもの** いじめに駆り立てる要因としては、①**学校という特殊な空間性(軍隊-刑務所-宗教団体、といった3者を統合したような空間閉鎖性が、個々の子どもの思考力や判断力を歪める傾向がある)**、②**競争的価値観によるストレスの発生(勉強・教師・友人・家族などのストレスが「不機嫌怒りストレス」を経由して「いじめ加害」に向かう)**、等が挙げられる。こうした視点からは、「加害者の被害者性」という面も指摘でき、子どもたちをいじめに駆り立てるような環境や関係性を問題視すべきであり、子どもたち自身の、環境を改善していく力の育成が必要であることが考えられる。(以下次号)

※ 次号は、いじめの未然防止への取組について